

会報

No. 81

平成22(2010)年3月15日

京都府図書館等連絡協議会

事務局

京都市左京区岡崎成勝寺町9
京都府立図書館内
TEL (075) 762-4655

よむひと

京都市中央・右京中央図書館館長 中西進

中国から文字が日本に入ってきたとき、日本人は対応に困っただろう。とにかく文字がなければ書くことも読むこともなかったのだから、それに相当することはもなかったはずだ。

とうぜん、以前からもっていたことばで対応するしかない。そこでとにかく文字を書く方は「かく」という単語で対応した。文字がなくても、彼らは土器などの土を欠き削って模様を、ヘラでひっかきながらつけていたのだから「掻く」と同じだと考えた。媒体が紙になろうと木になろうと、粘土板を欠く要領はかわらなかつたのである。



中国から文字が日本に入ってきた。この数えることを「よむ」といった。神話に早々と、月読命つくよみのみことが登場するたぐいである。

この知恵は生活に必須で、誰でも知っていたから、文字を読むことを、数えることと同じ対応だと考え、文字も「読む」次第となった。

さて、わたしが驚嘆するのは、この数えることの「よむ」が飛躍的に変貌していったことだ。

一字一字を字数として数えることはできるだろうが、文字ともなると、数の記号の一、二、三というものではなくなる。それぞれが意味をもつからだ。そもそも「文字」とは「美しい字」という意味である。そのが字と文字の違いである。

この文字を知って以来、日本人は「よむ」を数えることから格段に発達させた。一二三四といくら声を出して数えても無意味だが、意味が連鎖する文字を音読するとリズムが生じ、美しい音楽まで誕生した。

ここでリズムが大切な詩歌はかならず声に出して「詠よ」んだ。「よむ」が詩歌を作ることも意味するようになったのは、そのためである。

そしてまた、われわれが文章を「読む」行為が、このリズムもあり、字形も美しい字の、さらに意味を受けとろうとすることとなった。

断片の文章を読めば感涙をもよおし、一大巨編を読めば壮大なドラマや宇宙観があたえられることとなる。

人間生身の何倍もの経験をすることだろう。

また難解な外国語を日本語におきかえて理解することも「訓よむ」といった。

のみならず相手の胸の中まで入りこんで、心をよみ取る手段まで「よむ」ということばで表現するようになった。顔色の観察まで「よむ」というのが現代語である。

「よむ」という単語の意味の増大は、単に数を数えるだけにおわらない大切な人間の行為を、この単語に託した日本人の歴史をもの語っているように思われる。



北部地区実務研修会に 参加して

福知山市立図書館中央館
眞柴久美子

平成二十一年十二月十日(木)、みやづ歴史の館において、福岡県宮若市図書館準備室の白根一夫先生を講師にお招きして「高齢者サービスをひろめようー高齢者より添う図書館をめざしてー」が開催されました。

少子高齢化は全国的な課題ですが、北部では特に高齢化率が高く、今後ますます高齢者に向けてのサービスの充実が必要です。そのため他館での取り組み事例を学びたいと思い、研修に参加させていただきました。

研修では、高齢者サービスの一つとして「思い出語り」を取り上げ、イギリスでの研修の様子や図書館・高齢者施設での実践の様子をビデオで紹介していただきました。昔のことを思いだし、会話することで、生き生きとした表情になる様子に、高齢者が主役の取り組みであることを実感しました。図書館は、図書の貸し出しだけで終わるのではなく、利用者の活力を充電することができる生涯学習施設であるのだと

改めて思いました。

また、「どのようなサービスも、サービス自体が目的ではなく、図書館の資料やスタッフが利用者活用されるのが目的である」という講師の言葉が印象に残っています。

福知山市では、これまでに大活字本や朗読力セットの貸出、移動図書館車による高齢者福祉施設への巡回訪問などを行っています。

研修での学びを参考にし、利用者活用されるサービスとは何かを考えていきたいと思えます。

中部地区実務研修会に 参加して

京都市醍醐中央図書館
吉村 麻

平成二十一年十一月二十日(金)、キャンパスプラザ京都にて開催された実務研修会「語り継ごう！京の民話・わらべ歌く京の伝承の担い手と図書との架け橋く」(今回は京都府教育委員会読書ボランティア養成事業対象講座として募集)に参加させていただきました。

前半は、元京都文教短期大学准教授の北川喜美子先生による民話についての講演でした。「幼児期に身近な人から民話(昔話)を聞くという愛情体験が、その子どもの根っこの

部分を作り、それは他人には見えなけれどとても大切」とおっしゃったことが印象に残りました。また、民話をはじめ、無形の文化遺産を次の世代へ伝えていくことの重要性も強調されていました。

後半の、三上啓子さんによる京のわらべうたの実演では、子どもたちの目線に立ち、子どもと一緒に楽しむことの大切さを再認識することができました。続く松井昌子さんと吉村悦子さんによる京の民話の語り(実演)はとても素晴らしく、美しい京ことばで語られる京の民話を、この「郷土」で育つ子どもたちにぜひ繰り返し聞いてほしいと強く思いました。

子どもと本との豊かな出会いを大切にするとともに、これまでも行事等に取り入れてきたわらべうたや民話の魅力を、さらに伝えていくことが出来るよう、今後も積極的に取り組んでいきたいと思えます。

南部地区実務研修会に 参加して

井手町図書館
丸山 聡子

平成二十一年十月八日(木)、久御山町ふれあい交流館ゆうホールで南部地区実務研修会が開催されました。

た。

「では、みなさんこれから一階の図書館へ行って、課題のテーマでブックトークしたい本を選び、時間内に戻って発表してください。」とブックトーク研修講師の城野氏がおっしゃいました。

それまで、受け身で城野氏の実演や講義を聞いていた私は、正直、戸惑い、焦りました。

また、書名等で検索するのではなくて、日常、目の前を本が通りすぎる環境の強みを生かして、という注文もつけられました。

他の館の参加者の方々も、それぞれ、制限時間内に選書をされておられました。自分が知っている本が所蔵されているとは、限りません。時には、他の参加者と同じ本を同時に探しながら、ようやく「たまご」と「おにいちゃん、おねえちゃん」のテーマで一人二冊ずつの本を確保し、発表の場となりました。

参加者が一人ずつ自己紹介を兼ねながら即席で簡単に本を紹介していきます。人によって切り口が違い、絵本あり、科学読み物あり、長編小説あり、と同じテーマでも、全く違う本を選ばれる、ということも新鮮でした。

対象年齢の指定はありませんでしたが、それは公共図書館の場合の現

場では何歳の利用者の方が聞いてくださるかわからないからかな、と後になってから思いました。実践的な研修に参加させていただき、現場に生かしたいと思いましたが、ありがとうございます。

**全国図書館大会に
参加して**
京都市中央図書館
甲山扶美子

平成二十一年十月三十日（金）、明治大学をメイン会場に全国図書館大会が、「図書館は力 人・本・情報・まちづくり」をテーマに開催されました。

塩見昇日本図書館協会理事長からの基調報告に続き行われた記念講演では、信山社（岩波ブックセンター）代表取締役で、「本の街・神保町を元気にする会」の事務局長でもある柴田信氏から、「本ー人ー街 本屋だから見える街づくり」というお話をお聞かせいただきました。

書店と図書館という違いはありますが、仕入れや選書にひたむきでなければならぬなど、共通する部分も多く、大変参考となるお話でした。中でも「本の力を信じ、本に関わる人を信じる」という言葉が印象的で、改めてその大切さに気づか

れました。

当会では、書店・大学図書館の在庫を開示するシステムの構築や、本に関するイベントの開催など、活発な活動を行っておられるとのことですが、活気あふれる街の様子からも、その活動が地域に根ざしたものであることが窺えました。

午後に参加した分科会では、OPACなど図書館をめぐるIT環境に関する話題が取り上げられました。家庭で当たり前のようにインターネットが利用されている現在、そのための技術もどんどん開発され、図書館においても、次世代OPACなどの新たな技術が注目を集めています。しかし実情は、まだまだ利用者のためのシステムとは言えず、デジタル化という面では、図書館よりも利用者の方がはるかに進んでいると感じることもしばしばです。

特に後半の、OPACへの不満に関するビデオインタビューでは、実際の図書館利用者の声を聞くことができ、これまで自分が当たり前と感じていたことが、果たして利用者にとってもそうなのかと、改めて考え直す機会となりました。

利用者の不満や要望をきちんと把握し、それに向き合うことの大切さを再認識する、大変有意義な研修でした。

**全国公共図書館研究集会
サービス部門・総合・
経営部門に参加して**
京都府立図書館
島村 聡明

平成二十二年一月十四日（木）十五日（金）、新潟市民プラザにおいて全国公共図書館研究集会が開催されました。

地元の方たちも驚く程の大雪のため、新潟にたどり着けなかった参加者もいた中、どうか、無事、全日程を終了することができました。

「出版文化の危機と新しい図書館像」という研究主題で、初日は、基調講演と事例報告が二本ずつ、二日目は、日本図書館協会からの情勢報告と講師全員によるパネルディスカッション、さらに、午後から新潟県立図書館の見学という内容でした。

講師の一人である、ポット出版の沢辺社長によると、「出版社・出版業界の危機ではあるが、決して、出版文化の危機ではない」とのことでしたが、NDLによる所蔵資料の大規模デジタル化や、商業的な電子書籍出版の拡大が進展する中、利用者が容易に一次情報にアクセスできる

ようになる社会で、図書館が果たす役割とは一体なにか？というものが、我々に課せられた課題と感じました。

個人的には、直接、テーマとは関係ないものの、「NDLは公共図書館に何をしてくれるんだとか、業者が電子コンテンツを増やしてくれないとか、もう、いい加減、そういう姿勢はやめないか。『できない理由』を挙げるのは、単なる時間の無駄。一つでも、できることから始めてみては、どうだろう？インターネットの発達で、たった一人でも、何かができる余地が格段に広がった」という、同じく、沢辺社長のメッセージが、最も印象に残りました。

**近畿公共図書館協議会
研究集会に参加して**
京都市左京図書館
高井かつみ

平成二十一年十一月十八日（水）、京都市生涯学習総合センターにおいて標記の研究集会が開催されました。午前の基調講演では、「いのち」にふれる」というテーマで京都市中央図書館の中西進館長が、劇団四季のミュージカル『美女と野獣』

を取り上げて、「本を読む」とはどのようなことか、という問いを提起されるなど、親しみやすい語り口で、示唆に富んだお話をされました。また、『図書館』あるいは『情報館』という呼称を巡って、「情報提供機能」と「読書提供機能」は別のものであり、本の中から情報を取り出す行為がある一方で、文字群の中に沈む行為が読書である、という言葉は、あらためて図書館の存在と役割について考えさせられるものでした。

午後は、和歌山県立図書館、たつの市立龍野図書館、京都市醍醐中央図書館の児童サービスを中心とした事例発表と研究討議が行われました。地域特性や館の規模も異なるそれぞれの館の取組みは、とても興味深いものでした。地域の学校に図書館が『出前』をする試みなど、どの館の発表からも、身近な課題を掘り起こし、地道にコツコツと積み重ねていくことの大切さが伝わってきました。研究討議では、理解がより深まり、様々な連携の可能性を感じることができました。今回の研修に参加して、市民や関係機関との繋がりにより図書館が活かされるよう、努力していきたいとの思いを強くしました。



平成二十一年十一月八日(日)、京都府立図書館にて、京都府立総合資料館と京都府立図書館との連携事業として「古典の日」にちなんだ講演会を開催しました。

講師に京都府立大学の池田敬子文学部教授をお迎えし、「平家物語の魅力 清盛の人物造型」というテーマでご講演いただきました。

定員の八十名をオーバーする申し込みをいただき、当日は晴天にも恵まれ大勢の方が集まっていただけでした。

池田先生からは、平家物語に描かれた平清盛の悪行、性格表現、病と死、等についてお話いただきました。ユーモアの効いた歯切れの良い内容で、会場は出席された方々の熱気一杯となりました。

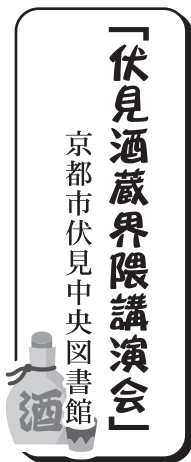
終了後のアンケートでも、「わかりやすい内容で、平家物語がより身近になり、是非原文で読んでみたい」、「仏教とのかかわりが理解できた」等の感想をいただきました。

講演終了後、江戸期(延宝年間、

元禄年間)に刊行された『平家物語』『源平盛衰記』を出席者の方に実際に手にとってみていただく機会を設けました。

今回見ていただいた『平家物語』は、ひとつの帙(ちつ)の中に十、十二冊の和書がくるまれています。『源平盛衰記』は十三冊です。

絵(挿絵)入りのものを見ていただきました。清盛の最後の場面、安徳天皇の入水の場面等、有名な場面が描かれています。写本ではありませんが、文字が現在の活字と異なり、くずした毛筆の字なので、読み取るのは至難の業です。それでも、古書市にでもいかなければ手に取る機会は無かったにないためでしょうか、大勢の方に楽しんでいただけました。今後、古典籍に親しんでいただける取組を進めていきたいと考えています。



京都市伏見中央図書館では、去る十一月二十八日(土)、平成二十一年度「伏見酒蔵界隈講演会」を月桂冠株式会社との御協力により、伏見区内の月桂冠昭和蔵ホールで開催しま

した。

この講演会は、平成十九年度の開館二十周年記念事業の一つとして始めたもので、伏見の歴史、文化等の情報を市民に提供し、関心を高めていただくことにより、京都市伏見中央図書館の利用を促進することを目的としています。

今回は、「伏見から日本の歴史が見えてくる 三」として「鳥羽・伏見の戦直前の伏見の街と新選組」付坂本龍馬のこともテーマとして、地方史研究家で元京都府立桃山高等学校教諭の山本眞嗣先生に御講演いただきました。

翌年のNHK大河ドラマが「龍馬伝」ということもあって、事前配布の入場整理券を求める市民の方が図書館のカウンターに次々と訪れ、当初の定員百三十名を三百二十名に増やして対応するなど、関心の高さに驚かされました。

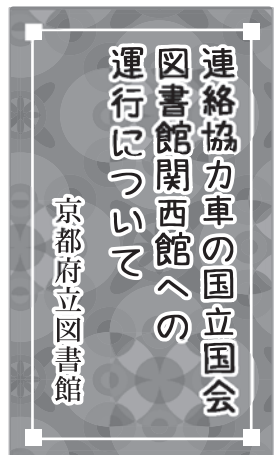
講演は、一「王政復古」後の伏見の変化／(二)尾張藩邸／(三)慶応三年十二月二十日頃の伏見の状況／二開戦までの経過―慶応三年十二月／三戦争回避の努力も空しく、慶応四年一月三日を迎える／付伏見に於ける坂本龍馬／という内容で、たくさんさんの古文書や古地図を映写しながら熱くお話しされました。地元ということもあって、地名を聞

ただで、その戦闘の光景が思い浮かび、まるでタイムスリップしたかのような時間でした。

特に伏見街道や竹田街道を駆け抜ける新政府軍と旧幕府軍との決戦が、その後のこの国のかたちを決めたと思うと、まさに「伏見から日本の歴史が見えてくる」というタイトルのとおりで、伏見に生まれ、伏見で育った方にとっては、郷土を誇らしく思われたのではないでしょうか。

当日の配付資料として幕末関連書リストを作成し、新選組、坂本龍馬、鳥羽・伏見の戦などに関する所蔵図書を紹介し、図書館利用を促しました。また、講演会終了後は、「幕末をかける！」をテーマとする展示を行い、関連書リストの増補版を配架したことにより、関連書の貸出し冊数が増えました。

京都市伏見中央図書館では、〈伏見にかかわる資料の収集に努め、地域情報の発信拠点となる図書館を目指す〉ことを基本目標の一つに掲げており、来年度は、講演会のテーマを拡げること、新しい利用者を開拓していきたいと考えています。



国立国会図書館関西館所蔵資料（貸出制限資料、学術文献録音テープ及びアジア言語資料等のNDL-OPAC未収録の資料を除く）の相互貸借に係る館間貸出・返却については郵送又は来館によるものでしたが、国立国会図書館との協議が整い平成二十一年十一月二十八日から国会図書館の利用登録をしている館に対して、京都府立図書館連絡協力車を利用した搬送が可能となりました。

これにより、京都府立図書館・府内市町村図書館が国立国会図書館関西館の所蔵資料を借り受ける場合の物流が整備され、また、郵送料が削減できることから、国立国会図書館関西館と京都府立図書館・府内市町村図書館の連携が一層進むものと期待されます。

利用に際しては、貸出件数として、国立国会図書館本館と関西館での来館貸出及び郵送貸出、並びに関西館での連絡協力車による貸出を合わせ十冊以内。貸出期間は関西館

で貸出の登録をした日から一ヶ月以内。申込方法はNDL-OPACによるものとなっています。

国立国会図書館関西館の資料を利用の際には、郵送料の節減等に連絡協力車を是非ご利用ください。

『学校支援セット貸出』を利用してみよう
宇治田原町立図書館
鈴木 琢也

今年度より宇治田原町立図書館では、教職員へのサポートを目的に、各小学校を訪問して、授業支援のための資料提供を呼びかけ始めました。

始めるにあたって、教職員の方々にお話を伺うと、「図書館や図書室の本を利用した勉強をさせてあげたいのだけど、資料数が不足していたり、内容が古かったりするので…」という声が多く聞かれました。そこで資料提供手段のひとつとして、京都府立図書館で取り組んでいた「都府立図書館で取り組んでいた、紹介させていただきます。学校図書室はもちろん、町立図書館も限られた予算では、同じ分野の本を複数そろえることはもちろん、内容がど

ンドン更新される分野について、新しい資料もなかなか購入できません。そういった意味で支援セットは、学校がされたかった授業に非常に役立つものだと思います。

学校訪問を開始して、利用の案内をすると、さっそく「環境」についての資料依頼がありましたので、支援セットを活用させていただきました。タイミングがよかったのか、希望したセットをすぐに用意していただけたので、さっそく小学校に持っていくと、本の内容の新しさと冊数の多さに、依頼をくれた先生も期待していた以上だったらしく、大変喜んでいただきました。約三週間授業で活用していただき、満足の声とともに返却していただきました。また、これが他の先生方の関心も集めていただけたようで、今後の活用へのいいアピールとなりました。

私たち図書館にとりましても、今回送られてきた資料を、子どもの反応を知ったうえで実際に手に取って見れたことは、今後の選書の参考になり、とても有意義なことでした。

今後も積極的に支援セットの活用を呼びかけるとともに、図書館資料選書の参考にしていきたいと思えます。



平成二十一年度 第三回理事会報告

平成二十一年度第三回理事会が平成二十二年二月十七日(水)、京都府立図書館において開催されました。

仁科会長からのあいさつ、京都府立図書館から市町村連携・支援事業等についての説明、京都府教育委員会から「京都府子どもの読書活動推進計画(第二次計画)」の説明の後、今年度事業実施について○読書ボランティア養成支援事業○第九回「子ども読書絵てがみコンテスト」○各専門委員会活動状況等についてそれぞれ報告されました。

続いて、○今年度総括○次年度事業計画及び予算○次年度の理事会及び専門委員会の体制等について協議されました。

また、定期総会は四月下旬頃に開催する方向で進めることとなりました。

その他、○京都府図書館総合目録ネットワークの現況○図書館・読書施設等職員研修実施報告○連絡協力車の次年度巡回コース(案)○学校支援セット貸出○国立国会図書館関西館との連携○表彰規程改正後、初めてとなる表彰候補者(団体)の推薦○子どもをはじめとした読書活動推進の取組等について報告、情報交換がされました。

★専門委員会ニユース★

◎研修研究委員会

★読書ボランティア養成支援事業対象講座「語り継ごう！京の民話・わらべ歌」京の伝承の担い手と図書との架け橋(兼・中部地区実務研修会)の報告

平成二十一年十一月二十日(金)キャンパスプラザ京都において、百三十六名の参加を得て開催いたしました。元京都文教短期大学准教授の北川喜美子氏から民話の成り立ちや幼児期において民話等を周りの大人に語ってもらうことの大切さについて講演があり、その後、三上啓子氏による京のわらべ歌の実演、松井昌子氏・吉村悦子氏による京の民話の語りの実演がありました。参加者からは、「わらべ歌・民話を守り伝えていくことの大切さを学んだ。実践に取り入れたい」などの声が聞かれました。

◆北部地区実務研修会の報告

「高齢者サービスをひろめよう」高齢者および添う図書館をめざして」と題し、平成二十一年十二月十日(木)二十二名の参加を得て、みやび歴史の館にて開催いたしました。

た。講演では、元島根県斐川町立図書館長の白根一夫氏が、図書館における高齢者サービスの重要性について話された後、回想法を取り入れた思い出語りの活動など斐川町立図書館で取り組まれた内容を写真を交えて紹介されました。参加者からは、「自館においてもやれることから実現していきたい」などの声が聞かれました。

◎相互協力委員会

平成二十一年度相互協力実務担当者会議が平成二十二年三月三日(水)京都府立図書館において開催され、相互協力委員会事業や京都府図書館総合目録関連について説明、報告がされました。

◎広報委員会

平成二十二年一月七日(木)に京都府立図書館で第三回広報委員会を開催し、会報八十一号の編集等を協議しました。

第八十一号は予定どおり三月十五日発行とし、作成日程、分担を決定しました。

また、現メンバーでの編集は今回が最後になるため、今年度の反省とあわせて次期委員会への申し送り事項について話し合いました。

✿ 編集子 ✿

新メンバーで平成二十年度にスタートした広報委員会は、アメリカ発の金融危機で百年に一度といわれる世界不況の年に始まり、昨年は新の字に象徴されるように新型インフルエンザや新政権の誕生など激動の二年間でした。また、府及び各市町村は大変厳しい財政状況であり、各図書館の予算はより一層厳しい状況の中での紙面づくりでした。

そのような中、読書ボランティア養成支援事業、子ども読書の推進やレファレンスの取り組みなど各館の様々な取り組みを多く紹介できました。今後ともさらなるサービスの向上を図るため、各館が情報交換し地域の拠点として情報発信していかれたらと思います。

最後になりましたが、執筆や紙面づくりにご理解とご協力をいただきました皆様から感謝を申し上げますとともに、来年度、新たなメンバーでスタートいたします本委員会を引き続きご支援いただきますようよろしくお願い申し上げます。